

台北市におけるホームレス支援の ユニークな取り組みとその顛末

—台北市の前「社会福利工作人員」楊運生氏のブログより—

楊 運生*、蕭 閔偉**

Yun-Sheng YANG, Hong-Wei HSIAO

The Details of an Unique Homeless Support in Taipei City:

Focus on the Blog of Yun-Sheng YANG, a Former Social Worker of Taipei City Government

はじめに

楊運生さん(49歳)は、専門学校でジャーナリズムを専攻するも、ホームレス問題に強い関心を持ち、張獻忠さんと共にやがて台湾におけるホームレス支援現場の草分け的存在として知られるようになる。台北市社会局にて11年間のキャリアを持ち、台北市ではじめてホームレス支援を専門とする社会福利工作人員(ケースワーカー、以下同様)として経験を積み、その間路上生活者向けの情報誌「平安報」を創刊し大きく注目を受ける。

2009年に台北市社会局から引退するも、台北市社会局時代の同僚で長年ホームレス支援現場の同士である張獻忠さんと共に民間支援団体である「芒草心慈善協会」の設立を手掛ける。芒草心慈善協会は2011年の設立以来、アジア各地の組織とも交流を進めつつ各国の経験などを学び、台北の支援現場における革新的な支援モデルの構築に取り組み、2013年法人化を実現する。現在は、竜山寺地区を中心に路上生活者への支援をはじめとして、路上生活体験キャンプ、まち歩きガイドツアーなど各種の斬新な事業を通して、路上生活者の自立と共に一般市民に向けた意識啓発を主な目標として活動を続ける。張獻忠さんも後に台北市社会局でのケースワーカーとの両立が難しい等の関係で、市の職員を辞職し、芒草心慈善協会の活動に専念することとなる。

楊、張両氏の大きな特徴としては、まず前者は大学でジャーナリズム、後者は人類学などをそれぞれ異なる分野を専攻するも、二人とも偶然にもホームレス問題への強い問題意識から畑違いの福祉行政に人生をささげることとなる。また、楊、張両氏ともに台北市社会局で長い間キャリアを積むものの、二人とも嘱託(契約)職員であるゆえ管理職ではなく現

場一筋のたつき上げで当事者に密着した活動を継続してきたが、両者とも自身の身分や地位への固執がないからこそ、こういった活動の結実に繋がったとも考えられる。

両氏や芒草心慈善協会の活動に関する先行論文としては、両氏が実際ホームレス支援の現場でも活用してきた関連諸制度やその運用実態に着目した研究が挙げられる。社会救助法との関係性をまとめたもの(中山, 山田, 2013, 2014; 中山, 2016)や、その中における経済型ホームレスに特化した支援の実態を解明したもの(中山, 山田, 2015)、さらに国際比較を企図したもの(水内俊雄ほか, 2004; Mizuuchi ed., 2006)も見られる。また、両氏がこれまで市のケースワーカーとして積極的に支援対象者への居宅移行を進めてきた中で、地域での狭小廉価住宅が多く活用されており、その中で生活者の居住実態に着目したものの(中山ら, 2012)や、居宅移行に至るまでの一連の支援の仕組み構築を明らかにしたもの(蕭ら, 2016)もいくつか見られる。最新の動向として、その後の両氏の芒草心での活動の実態やその成果を取り上げたもの(蕭ら, 2017; 中山, 2018)もある。一方で、支援現場でのホームレス個々人のライフストーリーや、ケースワーカーとの生々しいやり取りや関わり方についてはこうした「論文」や「研究」の中で扱うのには限界があるため、その内実や全貌を把握するためには、実際のケースワーカーが現場での経験などを具に記録した文章などからひも解いていく必要がある。こういった問題意識から、本稿の執筆に至った次第であり、これこそが本稿の意義とも言える。

楊運生さんは、これまで20年程度ホームレス支援などに関わってきた経験や日誌などを「運生の路上生活異世界ブログ」を通して多くの記事を公開してきた。その概要は表1の通りである。ここでは、楊

* フリーランス、社団法人芒草心慈善協会共同創設者

** 大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻講師

さんが長く台北市社会局のケースワーカーとして取り組んできたことを概観できる入門として「台北ホームレスとの付き合い：支援プログラム編」の5編の記事を取り上げる。400を超える彼の多くの記事から、選出されたこの5本の記事からは、制度の運用に関する大まかな全体像、さらに実際の台北市のホームレス当事者の生活歴などをうかがい知ることができる。

また、これらの記事のもう一つ重要な意義として、当時の楊さんは市の職員という身分で、路上生活当事者のことを最優先に考えて既存の制度をうまく利用しながら、大胆かつ斬新な支援提案を次々と打ち出し、さらに市の職員であるからこそ直面せざるを得ない束縛に向き合いつつ、プライベートでも全力で支援活動に取り組む姿勢とその実態を如実に読み取れると考える。特に、これらの記事の特徴としては、ホームレス・路上生活という厳粛な社会問題に鋭く切り込みつつも、彼自身のユーモアを交えたエッセー感覚の馴染みやすい文書で、社会派特有のくどさや堅苦しさなど感じることなくすらすらと読み進めていってしまう点にある。

参考文献

- 水内 俊雄ほか (2004) 「ソウル・香港・台北におけるホームレス支援施策の現状 連載 (上) (中) (下)」, 季刊Shelter-less, 23: 87-119, 24: 163-200, 25: 171-214.
http://inclusivitycitynet.or.jp/files/sites/4/shelterless_23.pdf
http://inclusivitycitynet.or.jp/files/sites/4/shelterless_24.pdf
http://inclusivitycitynet.or.jp/files/sites/4/shelterless_25.pdf
- Mizuuchi Toshio, ed.(2006): "Current Status of Assistance Policies for the Homeless in Seoul, Hong Kong, and Taipei", Urban Research Plaza, Department of Geography Osaka City University, 81p.
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/wp1/wp-content/uploads/2016/06/URP2.pdf>
- 中山 徹 (2013) 「台北市における遊民支援施策研究の意義について」, 大阪府立大学地域福祉研究センター年報 2: 9-11.
- 中山 徹 (2016) 「第8章 台湾における公的扶助と補完的貧困政策」, 市大都市研究の最前線—公募型共同研究による連携講座2015— (p.51-56), 大阪市立大学 都市研究プラザ.
<http://gcoe.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/Booklet8.pdf>
- 蕭 閔偉, 瀬田 史彦, 城所 哲夫 (2016) 「台北市における『ホームレス支援住宅』の実態に関する考察—その供給ネットワークと諸アクターの役割に着目して—」, 日本建築学会計画系論文集, 81(727): 1991-2001.
- 蕭 閔偉, 城所 哲夫, 瀬田 史彦 (2017) 「台北市亀山寺地区における住民と地域の自立の関係性を実現するまちづくり：社団法人台湾心草心協会 (Homeless Taiwan) の活動による効果に着目して」, 都市計画論文集, 52(3): 560-567.
- 中山 徹 (2018) 「一般社団法人心草心慈善協会の事業展開と特徴」, 第2回先端的都市研究拠点国際実践セミナー報告書 (p.24), 大阪市立大学 都市研究プラザ.
<https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/wp1/wp-content/uploads/2018/06/urpreport44.pdf>
- 中山 徹, 全 泓奎, 山田 理絵子ほか (2012) 「台北における狭小廉価住宅居住者の生活支援の系譜と現状」, ホームレスと社会, 7: 101-106.
- 中山 徹, 山田 理絵子 (2013) 「台北における遊民支援の制度的枠組みと補完的生活支援」, 社会問題研究, 62(141): 43-52.
- 中山 徹, 山田 理絵子 (2014) 「台湾における社会救助法と遊民支援策」, 社会問題研究, 63: 53-68.
- 中山徹, 山田理絵子 (2015) 「台湾におけるいわゆる『経済型』遊民に対する就労支援—台北市を事例に—」 地域福祉研究センター年報, 4: 25-32.

表1：運生の路上生活異世界ブログの目次に関するまとめ

カテゴリー	記事年代	記事数	概要 (そのまま転載・翻訳)
あなたに平安を伝える平安報 ——昔のホームレス向け情報誌	2005年当時 (記事投稿は2017年)	26	昔の雑誌で昔の思い出、 ネットの発達に伴い必要がなくなった。
海外ホームレス資料読書感想	2016年	18	単なる感想文：引用しないでください。
文章から見るホームレスインタビュー ——我が人生を語る	2013-2016年	89	路上生活から語る我が人生。
新北市のホームレスとの付き合い ——幸福居編	2013年	21	新北市は過去にあまりなじみがなかったが、たまたま新北市公設民営の支援センター幸福居に来てホームレスの方々としばらく一緒に、6か月間にわたる活動からさまざまな感想と収穫が得られた。
2012 韓国ホームレス会議 ——感想と日記	2012年	6	第二回の東アジアホームレス会議がソウルで開催、それにあつた感想と日記。
台北ホームレスとの付き合い ——人数編	2006-2007年当時 (記事投稿は2016年)	12	路上生活はいつ終わり、いつ再起できるか誰もわからない。

台北ホームレスとの付き合い ——武崗 SARS 防衛線編	2010 年	9	SARS (2002 年頃アジアで大流行した伝染病) が来て、地域はビビり、住民は怒り、ホームレスは弱り、オアシスを求めてしばらく隠れよう。武崗：2 カ月にわたるシェルター。
台北ホームレスとの付き合い ——支援プログラム編	主に 2010 年 (最終更新は 2017 年)	5	台北で十年間支援活動に従事 制度内のプログラムの他に、独自の小さなプログラム色々取り組んできたので経験共有しよう。
台北ホームレスとの付き合い ——隠れた人材編	主に 2010 年 (最終更新は 2016 年)	10	ホームレスになった原因はいろいろある。ホームレスは能力がないわけでもなければ、社会のために貢献した経験がないわけでもない。今はくすぶって、路上生活を送っているけど、いつかは自分の能力を生かして自身を奮い立たせよう。
台北ホームレスとの付き合い ——就労成功は我にあらず編	2010-2011 年	9	ホームレスへの就労支援、長い道のりでありながらも成功経験は少なく、その反面失敗経験は多数。成功したのちにまた失敗に転落した場合もあり。またその逆もしかり。
台北ホームレスとの付き合い ——危ない稼業編	2010 年	6	金を稼ぐためにはめられ、危ない目に遭い、投獄され、それに関するエピソード。
台北ホームレスとの付き合い ——正しい稼業編	2010-2012 年	10	行きていくために金稼ぎは基本である。ホームレスならではの稼ぎ方もある。安全かつ正しい稼ぎ方を紹介する。
台北ホームレスとの付き合い ——魂との衝突編	2010-2011 年	26	不安定な気持ち、不安定な感情、魂との衝突は命に大きく響く。路上生活は危険である。脱施設なんて簡単にできるものか。二度と天使を路頭に迷わせるな。
台北ホームレスとの付き合い ——物乞い編	2010 年	6	生活にはお金がいる。生存には能力も体力も必要。物乞いは必ずしも称賛されるべき方法ではないが、もっと良い生活手段がない場合は give me more と言うしかない。
台北ホームレスとの付き合い ——海外さすらいもの編	2010-2011 年	6	異国に身を置くホームレスにも目を向けるべき。ホームレスの経験について国際交流しよう。
台北ホームレスとの付き合い ——取っ組み合い喧嘩編	2010 年	5	われわれは愛をもって取り組んでいるため怪我や喧嘩はよく起きるものではないが、愛が伝わらない場合は衝突も喧嘩も避けられない。無論、起きないほうが望ましい。
台北ホームレスとの付き合い ——栄民 (退役軍人) から遊民 (ホームレス) へ編	2010-2012 年	17	国を守る軍人、老いたら帰る家のない老人になり、どこでも良いから居場所を持つことだけが最後の願い。
慈濟とつながる心	2010 年	2	慈濟と共にいろいろ現場でも支援事業
タイ北部診療団について	2010 年	1	前々から台湾から出て国際支援に出かけることに興味があった。短期的な海外診療団であってもそれなりに満足はできる。
ミャンマーぶらぶら編	主に 1997 年当時 (記事投稿は 2009-2010 年)	25	ミャンマーにホームレス支援ボランティアに行った時の話。内戦と飛行機墜落などを経て、僅か 3 か月間のボランティア活動でこれまでにない人生体験ができた。
運生の路上生活異世界ブログ ——アメリカ編	2010 年	11	ホームレス問題の歴史が長く、経験も豊富な国。人々はもがきながらも淘汰されていく。命に一息を入れ、街角で一休み、公園で一休み。home...less
ホームレスを見つめる	2009-2011 年 (最終更新は 2018 年)	41	ホームレスは短い人生の中であるときホームレスになる。それぞれ原因があり、それぞれの物語もある。彼らと触れてきた喜怒哀楽を全て書き記そう！
運生の路上生活異世界ブログ ——日本編 (エッセー)	2009 年	3	日本で見聞したホームレス活動、パフォーマンス、支援団体の記録、シェルターの記録、支援団体による活動などさまざま、文字で記録と共に写真で記録する。
運生の路上生活異世界ブログ ——日本編 (日記)	2009 年	61	路上生活は簡単ではない。日本にも 2 万人程度のホームレスはいるという。彼らも彼らなりの方法で生存してきた。ここでは日本でのホームレスの方々の生活様式や支援団体の特徴について記す、興味あれば読んでね！

出典：https://blog.xuite.net/gugulasamから整理

ホームレスのプログラム (原著：楊運生 翻訳：蕭閔偉)

できる人を独り占めするな、マジで怒るぞ

ホームレスのためになにかできないか？と同時にホームレスの方自身が何か出来ることはないだろうか？野宿がすぐ解決できる問題じゃないとしたら、野宿しているこの短いようで長い日々の中で、一緒に何かやろう！こうしたコンセプトを前提として、私は大なり小なり、多かれ少なかれ、さまざまなプログラムに取り組んで来た。

「ヤドカリワークショップ」

なぜこの名前にしたかという、ある時アニマルプラネットのチャンネルを見ていて、ちょうどヤドカリのことを紹介していて、どうもヤドカリという動物は、体が大きくなっていくのに連れて、自分に合う貝殻を次々と探し替えては住み替えるらしい。

おっ！そういえばホームレス(人類もそうだけど)もある意味ヤドカリと同じではないか？ずっと自分に合う生活、適切な居場所を探し続けている。また、自分に合う居場所が見つかるまではとりあえずひとりぼっちでさすらい続けていて、たださすらいの目標というの、あくまで自分に合う居場所を早く見つけたい、たとえ自分一人しか入れないような小さなスペースでも、それなりに満足はするだろう。

この発想から、ヤドカリワークショップと名付けた。でもなぜワークショップをやるのか？実は、一部のホームレスの方は、ある民間団体で長い間、ボランティア的な形で日常業務をやらされているのに、台北市政府の社会局に対して彼らが金銭的な支援を求め続けているのを見て、ずっと気になってきた。

それで私はよく公の場で、あの民間団体は金をたくさん持っているのに、スタッフが必要なら、そしてこのホームレスの方たちの能力を認めているのであれば、なぜそのままこのホームレスの方たちを正規のスタッフとして雇わないのか？ボランティアから常勤職員に切り替えさせたほうが良いのでは？たとえ給料が高くなくても、ホームレスの方たちは認められたことになにより喜ぶのでしょから！さらにこういうことはまさに、この民間団体自身が今まで自分たちはホームレスへのサービスを提供していると大々的にPRしている内容ではないかと、批判をし続けてきた。

しかしこの民間団体はやはりお金を出し渋っているようで、毎回あの団体の代表がテレビに出て資金

が苦しいと言っているのを見るとついつい腹が立ってしまう。それで私はこのホームレスの方たちに、彼らはこの民間団体がというようなボランティアではないと分らせようとした。そして、毎月私たち(社会局)の事務所にお金を受け取りに来るように伝えた。お金を出しているのは、本当はどこなのかを分かかってほしいから。

考えても考えてもやはり気が済まなかった。心身の状態が良いホームレスだけを集めて自分の団体の仕事をさせておいて、その費用を税金から出させようというのであれば、私はこのホームレスの方たちに、もっと社会全体や他の弱者の役に立つような仕事をさせたいと思った。

それで私は、このホームレスの方たちの中から、左官、塗装などの建築現場の経験を持つホームレスの方たちを集めた。

筆者「あなたたちの毎月の給料は、実はあの民間団体ではなく、全部社会局が出しているのだから、社会局が皆さんを必要としたら、是非手元の仕事をいったん置いてここに集まってきてね、わかったか！もし手元の仕事を辞めないのなら、月末はちゃんとあなたが働いてるところの連中に給料を請求しに行くように、ここ(社会局)に来ないのなら給料を払う筋合いもないから。」

もちろん彼らは誰一人、文句ひとつ言えなかった！

なぜなら彼らはおそらく、私の優しい口調の中からいささか殺伐とした雰囲気を感じ取っていたのだろう。

それで彼らは私に「じゃ何をやればよいのか？」と聞いた。

「簡単さ、皆さんの能力を発揮して、社会的弱者の世帯で簡単な内装工事をやってくれば良い、そんなに時間はかからないし」と私は答えた。

その後私は社会局の各地域担当のケースワーカーに、もし当事者の住まいで左官、塗装、運搬、簡単な建築工事が必要そうなら何でもとりあえず知らせたいと周知した。なぜなら社会局は長期にわたり良心的で、善良な民間団体と連携してホームレスの自立支援に取り組んできているから、これからはもっと困っている人の支援にも役立たせたいと！半ば強引な理由も付け加えた(不満があってもやはりそれっぽく言わないと！行政にいる限りはやはり波風を立てないことが大切だ)

そこから次々と依頼の案件が舞い込んできて、地域の中で、例えば中正区のとある屋上にある違法増築の住民の家の防水塗装工事や、萬華区の一人暮らしのおばあちゃんの家のトイレの改修など色んな案件があった。このおばあちゃんは古くてぼろい和式

建築に住んでいて、たまに地域の日本語教室で講師をして小銭を稼いだりしていた。その家は本当にぼろぼろで、人手も工具も限られる中、トイレの簡単な修理の排水溝の清掃ぐらいしかできなかったのが残念だったが。ある時は信義区的福德平価住宅のあるおじいちゃんの家の洗濯機の排水管を通すための排水口を開けるために、わざわざ桃園県龍潭の私の地元の友人のところに行き、彼の工務店である実家からコンクリート壁に穴をあけるドリルを拝借してそれを使って工事をしたこともある。北投の老人ホームで入居者のためにペンキを塗ったり、さらにゴミ屋敷の片付けも行った。

しまいにはパンクしてしまった！自分が抱えている事案だけでも忙しいのに、工事のたびにわざわざ自分で運転してホームレスの方たちを現場まで送迎しないとイケなかった。やはり時間が取れずじまいだった。

あんなこんなで今はいったんストップしているけど、ペンキや清掃用の道具とかは全部とりあえず私が預かっている！

今でもなかなか腑に落ちない。ホームレスの方たちの能力を買っているのなら何故就労の機会を与えないのか？彼らがずっと野宿しているのはまさに就労の機会に恵まれないからなのに！もし彼らに就労の機会を提供できないのなら、彼らに台北市政府の労働局（職業紹介）に行くように勧めるべきであって、特別な福祉を受けながら路上に留まるように仕向けるのはおかしい！

私の視野が狭いからだろう、解決の糸口をつかめないまま、最終的にはやはり例の民間団体と正面衝突してしまった。その腹いせに、飛行機に乗って一人でカンボジア旅行に行ってきた、五日間ずっとメコン川沿いに座ってボーとしていた（どこにも観光には行かずに、ただ社会局からの連絡を絶ちかった）。

帰ってきてからもやはり腹が立つ！

人間ができてないからしょうがないか！

平安報

2003年に日本に行き、大阪市立大学主催のアジアホームレス会議に参加しに行くついでに、現地のホームレス支援団体を見学した。その中に「路情」という興味深い情報誌があったけど、なぜこの名前かというと、日本ではホームレスをもっとは野宿者（rough sleeper）と呼んでいたからだそうで、今ではhomelessと呼ぶことが多いそうだ。

台北と同じように、日本も多くのホームレスは中

高齢で、教育水準も比較的低い。特に大阪では、ホームレスの中の大多数は、過去もしくは現在の就労経験の中に、建築現場での日雇い労働の経験がある。

大阪のホームレス支援団体は、ホームレスが騙されて利用されないよう、なおかつ福祉に関する正しい情報を伝えるために、ホームレスを対象とした情報誌を出すことにした。ホームレスの方に有用な情報を集め、簡単な情報誌として編集し、ホームレスの方々に無料配布して、時にはボランティアを通じてホームレスが野宿している場所に赴き、ホームレスの方に配布している。

台北に帰ってきたら、やはりこの構想は良いなあと思い、やってみたくなった。台北のホームレスの方に注意してほしいことや、身につけておくべき生活技術や生存法なども寄せ集めて、ホームレスの方向けの情報誌として編集して配布すれば、ホームレスの方への注意喚起にもなる。

しかしやはり資金がない。私の悪い癖だ、やると決めたことなら、何をしてでも無理やり成し遂げる。

私的には、ホームレスの平穏で安全な生活を実現するための情報誌なので、ホームレスのために平穏と安全をもたらすという意味で、「台北平安報」と名付けた。簡単に言うと、平穏かつ安全に報われるという意味だ！

2003年10月に私は自分でコピー機を使って印刷し毎月大体350部を台北市のまちなかに野宿するホームレスに配っていた。

金もなければ、人手もないため、相当雑な仕上がりがだった。とにかく自分がやってみただけなので、たまにホームレスの方にも寄稿をお願いしたり；またはホームレスの方に一句書いてもらったり；海外のホームレスに関する記事を転載したりとか色々やってみた。

そんなこんなで何年も続いていて、しかもある日突然資金が入ってきたためカラー版に変えてみた。

はっ！はっ！カラー、しかも印刷会社の専門の人に編集もお願いしたら、なかなかの見栄えと仕上がりになった。

しかしあとから市の内規で、その資金を使った企画・編集作業も委託しないとイケないこととなり、私の手ではできなくなった。

まあいっか！

世の中はこんなもんさ！

でもやったことに何も悔いはないけどね！

路上三宝カップ

そういえばあの有名なホームレス画家——泊ちゃ

んは、私の依頼でイラストとかをたくさん描いてくれた。その後私も日本に行ったときにいくつか海外のホームレス支援団体を知り、これらの団体のHPから、ホームレスに関連するグッズを目の当たりにし、私も是非台北のホームレスに関するグッズを作ってみようと思うようになった。

それでここ数年は、ホームレスに接してきた経験と印象を踏まえて、二つの点をまとめた。まずホームレスは家庭、仕事、生活さらに恋愛関係などにおいて、何もかもうまくいかないのにもかかわらず、簡単に自分の命を絶つことなんて決してせずに生きる意欲をなくさずにいる。もう一つは、物質的な生活は貧乏で、消費能力もあまりないが、彼らはいつでも楽天的で、苦しい生活の中から楽しみを懸命に見つけ出そうとしている。

この2点から私は二つのテーマを考えた。一つ目は『活著就有希望(生きていれば希望はある)』、もう一つは『沒錢更要快樂(貧乏だからこそ楽しくやらないと)』、これを泊ちゃんにイラストに描いてもらって、それを使ってマグカップを作ろうと考えた。売れないと困ると思い、ケースワーカーの皆さんは常に愛にあふれていて、情熱がいっぱいだなあと思ったので、以上の二つにさらに『社工熱情滿滿(ケースワーカー情熱満々)』も付け加えて、3点セットのグッズにして、『路上三宝カップ』と名付けた。万が一売れなくても、最悪ケースワーカーの方々にも買ってもらえると企んだ。はっ！はっ！

さらにこの三つのテーマについて句も書いた！
ほら！

活著——就有希望(生きていれば希望はある)

就為破曉見天明(いつか夜明けにたどり就き)
有幸有命日日撐(幸いにも命だけは日々有り)
希冀淺嘗苦貧病(苦も貧も病も浅いよう希み)
望求平安喜樂生(ただ平安喜樂な余生を望む)

沒錢——更要快樂(貧乏だからこそ楽しくやらないと)

更換意念求平凡(平凡へと意念が更ぎ)
要得溫飽身平安(平安温飽を要し)
快意人生君莫貪(快き人生貪るなかれ)
樂自心中富貴現(樂は心中の富貴より現る)

社工熱情滿滿(ケースワーカー——情熱満々)

熱忱耗盡隨時補(尽きては熱き想い補い)
情感中立偏私無(中立で私情に偏らず)
滿懷專業網絡築(専門性に満ち人脈築き)
滿心歡喜貧困除(心に歡喜満ち貧困退治)

泊ちゃんにイラストを頼んだが、問題は、彼は白黒の画しか経験がなく、マグカップはカラーじゃないと話にならない！それでちょうど輔仁大学から学生メディアが取材に来たもので、あの学生記者に大学でただで着色をしてくれる学生がいらないか探してくれないかと頼んだら、なんと本当にしてくれる学生が見つかって、仕事が早い上に、なかなかの出来栄えだった。

やはり何もかも運命の巡り合わせなのか、偶然にも、私たちの自立支援センターに兵役で来た代替役の新人君は、その実家がなんと偶然にもマグカップメーカーで、彼の父親に新北市の鶯歌というまちにある焼き物業者を紹介してもらい、契約の話まで取り付けてくれた。

しかし何個作ればよいだろうか？

資金こそないものの、私がやると決めたからにはとことんやらないと！まず自腹で六万台湾元を出し、さらに同僚らからのカンパも加わりなんとか八万台湾元が集まった。これを元手に路上三宝カップを大量発注！

はっ！はっ！達成感に溺れつつも、また悩みが出てきた！

これらの商品を？どうやってさばけばよいだろうか？

量もあまり多くないので、まずは救世軍のホームレスケアセンターのチャリティーバザーに出すことにした。私たちは公務員である以上、販売はできないので売れ残った分は全部、私たちのセンターに来たインターン生や取材に来た記者さらに海外からのお客様への手土産として活用した！

それでもやはりあまりにも売れ残ったので、最終的にはセンターの引越しの際に処理せざるを得ないお荷物になってしまった。

結局残りは全部社会局の忘年会のプレゼントとして、みんなにお持ち帰りいただいた。

もちろん、自分がデザインしたもので、大事には思っているけど。

他の人からしたらそういう特別な感情は一切なくて。

世の中はこんなもんだから！

だから別に落ち込むこともないし！
少なくともやりたいことはやれたし！
まあまあ！私も自分の記念に何セットが取っ
てあるので！
へっ！へっ！八万台湾元がパーになったけど。

ホームレス人形劇団

電話の通話記録：

問：もしもし運生さんでしょうか？

答：こんにちは！そうです、どちらさまでし
ょう？

問：私はX大の教員で、私どもの学生では是非あ
なたのところで実習したい、あなたのホームレス支
援の技術を学びたいという子が一人います！

答：え！大丈夫かな！私なんかホームレス支援
の実習生なんか担当したことないし！学生の面倒
なんか見れないから！

問：いいじゃないですか！私どものあの学生は
ホームレス研究に大変興味があり、それから彼女
は色白の美人ですよ！

こら！私、楊運生をバカにしているのか、そんな
扱いはないんじゃないか？自分では常に上品かつ優
雅で落ち着いた性格と自負しているのに、いつの間
にそんなエロケースワーカー扱いになってしまった
んだらう？こう見えても、私は持ち前の専門性と現
場への情熱がなによりの自慢だというのに！

色白？美人？だからなに？

私はあの先生にきっぱりと「じゃ…とりあえず彼
女に明日から来るようにお伝えください！」

はっ！はっ！この子は私の10年にわたる社会局で
のキャリアの中で、唯一受け入れたホームレス専門
の実習生だった。でもやはり私は指導する力がなく、
プログラムを組むのも下手だし、人になにかを教え
るのも面倒だから、決していい先生になれる自信は
ない。

実習生が来たら、一緒にあちらこちらの現場に
行って勉強しつつ、なんか新しい取り組みでもやっ
てみようかと思った。

幸いこの実習生は大変優秀で、方向音痴なところ
以外は、だいたい何でもできる。それで救世軍ホー
ムレスケアセンターの李センター長と相談し、毎週

木曜は彼らのイベントの地下室を借りてホームレ
スとのふれあいをやることに。最初は映画観賞や
フォーカスグループインタビューをやったけど、そ
の後にはホームレスの方たちと共に日々春や楽生院な
どに見学にも行った。彼らには他にも多くの社会的
弱者が生きているために頑張っている現状を知ってほ
しいから。

ホームレスの方たち自身にも暗い部分と決別して
ほしくて、自分の生活に関する舞台や活動もやって
ほしいと考えた。路上生活というのは、やはり未だ
に世間的に悪い印象が拭えないので、彼らに表に出
て色々やらしてもらっては難しいけど、過去にはある
ホームレスの方が人形劇団の舞台をやっていた。

それでこの実習生と話し合っ、人形劇団でもや
ろうという話になった。

この実習生も早速その優秀ぶりを発揮し牯嶺街劇
場の舞台俳優の方をホームレスの方との顔合わせに
招き、その後すぐに数週間にわたるトレーニングを
開始した。ホームレスの方々も大変楽しんでくれて
いて、こうした活動の中で、ホームレスの方々に試
しに芝居をやってみてもらおうということになり、
ホームレスの方々もかなり意欲的で、それで三国演
義「劉備招親」（劉備の結婚）という一幕をやるこ
とに決めた。

みんな早速自分の役の練習をはじめ、さらに自身
の現実の生活での状況も取り入れつつ、例えば人物
紹介の時は自分自身の実際の年齢や趣味などを紹介
することにした。

例えば劉備役の人が自己紹介の際に、私は今年で
五十六歳、趣味はボーリングと新聞を読むこと、一
番の願いは宝くじにあたること、それから路上生活
を卒業すること、実に面白い。

その後実際一回公演もやってみた。

観客もみんなホームレスの方たちばかりだけ
ど、とにかく面白かった。

この経験から今後は積極的にホームレスを地域で
の舞台や芸術活動に巻き込んでみようと思った。

しかし残念ながら、実はこの取り組みの中で私ほ
とんどなにも役に立てず、何もかも基本的に実習生
の彼女主導でことが進んだ！私はただ資金調達やら
会場の予約とかの後方支援をやったぐらい。まあそ
れから自腹で講師謝金とかご飯代に五千台湾元ぐら
い出したという貢献もあるよ！ちょっと無理くりだ
けど！

最終的にやはり長続くは続けられなかった。一般
市民からのホームレスに関する苦情への対応だけで
もうへとへとになってしまったから。

それで辞職さ！

2014 ホームレスパソコン教室

前書き

自分は最近老眼がどんどんひどくなって、パソコンのモニター見るのが日に日にしんどくなってきた。スマホとか他の字の小さいものならなおさら(残念ながら技術の進歩に伴い、新しい商品はどんどん小さくなってきている)、ますます高齢者の生活の不便を体感できるようになってきた。それでふっと自分のパソコンには写真がたくさん保存してあることに気づき、その中に数年前にホームレスの方々にパソコンの使い方を教えているときの写真も入っていて、彼らが渋い顔でキーワードやマウスの操作をしている画像を見て、いろんな思いがこみ上げてきた。それで自分がまだパソコン打てるうちに(実はキーボードの記号などもだんだんくっきりと見えなくなりつつあるが)記録しておかなきゃと思った。それからパソコン教室の指導員(長年音信不通になっていた実習生)は真面目に授業の中で観察した状況やコメントなど色々な文字の記録を残していたのが見つかったので、ちょっとここで情報共有しよう！

ホームレスパソコン教室

最近長い間ずっと家に居て、親の世話をしているとはいえ、今後の人生が見えない日が続き、ただただぶらぶらしながら無駄な時間が流れているような気もしてきたそんなある日、突然救世軍のホームレス支援ステーションのスタッフから電話が来て、私にとあるプログラムをやってみないかと誘われた。救世軍には寄付された古いパソコンがたくさんあって、それでぜひホームレスの方々向けの就職準備を目的としてパソコン教室をやろうという話になり、私に興味があるかと尋ねてきた。その場で是非と即答したいところだったが、こういうイベント系は今までどちらかと言えば苦手で、やはり私は一人であちらこちらぶらぶらしておしゃべりするのが得意で、それでもやはり意欲がわいてきたので、とりあえずスタッフと一度打合せをして、顔合わせしてから決めようと思った(長いこと台北にも行ってなかったのだ)。

救世軍のホームレス支援ステーションに到着するなり、スタッフさんとだらだと世間話を始め(こ

れが一応私の得意分野なので)、そして地下室にメーカーばらばらのパソコンが積まれてあるのを見て、内心結構心配になった。まずホームレスの多くは中高年で、しかも老眼や慢性病とか身体障害などさまざまな問題がある上に、ただでさえパソコンの操作は難しい。私自身もそこまで得意なわけでもない上に、寄付されたこれらのパソコンは全部機種もサイズもばらばらで、実際授業となるといろいろ難航しそうだと思った。幸いに私に声をかけた救世軍の例のスタッフは、もともとパソコンが得意で、ハードウェアの修理からソフトウェアの操作まで、すべてお手の物らしい。つまり英語でいうとピースオブケーキ。

心の中では一瞬葛藤したものの、どうせ家にいてもやることないと思い、さらに週に半日間だけの授業なので、とりあえず気分転換兼社会貢献ということにしよう！と思ってそのまま承諾したら、なんと数カ月にもわたる授業の連続でしかも毎回ちゃんとシラバスと成績表を出さないといけないという！まあ、私の生まれつきの猪突猛進な性格で、後先考えずに承諾したのだからしょうがないや！

でも人生というのは不思議なもので、このプログラムの担当を承諾したと同時に、私と長い間音信不通だった例(私がホームレスのアウトリーチ担当のケースワーカーのキャリアの中で、唯一受け入れた実習生)から突然私に連絡が来た。彼女はとにかくこういうイベントが上手で、例のホームレス人形劇団も彼女がうまく盛り上げてくれたし、彼女自ら巽にかかりに来た(私に言わせれば助太刀だが)。おかげで、パソコン教室のプログラムに対して一気にやる気も自信も出た。

でも授業をやるからにはまずちゃんとプログラムを組み、シラバス通りに全体のスケジュールとかを決めなければならない。それで私なりに前提条件を考えた、要するにこのパソコン教室に参加するホームレスの方々はこれからパソコンをはじめの方、または長い間ずっとパソコンに触れていない方(特にキーボード入力)がほとんどで、しかもキーボードを見るのは老眼の方には多少しつらい(実際は相当にしんどい)。特にこれからはじめて入力に挑戦する人にとってハードルは相当高くなる。毎日触っている人ですら老眼で苦労するのに、さらにキーボードの配置や一個一個のキーの機能を認識しないといけないし、触ったことはあっても必ずしも覚えているとは限らないし、ましてはじめて触る人にとって位置はもちろん注音(中国語のひらがなのようなもの)やアルファベットさらに数字もあり、さらには

コマンドキーなどいろいろあるから、いきなりは状況を理解できないだろうという前提である。

それで最初は段階的に進めようと思い、まずはパソコンについて覚えようということで、通常のパソコン教室みたいにハードウェア、ハードディスク、キーボード、マウスとか一つ一つ紹介していくと、おそらく皆さんすぐに居眠り状態になったり教室から蒸発したり、こういう冷たい機械部品がいきなり目の前に出てきたら、本能的に拒絶反応を起こして、勉強意欲も落ちしまいには授業を抜け出しそうだなと思った。

それで私は画像付きの説明内容をスライド（パワーポイント）という形で教えることとした。スライドの強みは文字量が少なく、と同時に画像も入れられるし、さらに自分自身の自由な解説もできるから、より分かりやすくなり授業も盛り上がるのかなと思った。多様な方法で勉強するという意味でも比較的退屈しないし、さらに長時間スクリーンにとらめっこして目を悪くしたりすることもないと思った。

私たちの計画ではまずはDIYで実際の新聞を切り抜いたり、写真を切り貼りしたりして、その横にパソコンがある状態（もちろん電源もついたまま）を作り、彼らが切り貼りした作品はこれからパワーポイントに入れる画像だよということを認識させた。そこから順番にパソコンを知り、パソコンを使い、パソコンを使いこなし、最終的にはパソコンをマスターし、それから二十一世紀のITマンとなり、会社でも作って、そこから支店も作って、一店舗が二店舗になり、二店舗が四店舗、四店舗が八店舗、八店舗以降は上場をして、上場して資金集めたら、株の運用で大儲けし、そこからは地上げ屋に転身し、さらに新しい会社も作り、その後は利息の収入だけで食っていけるようになる!ははは...（実は全部某・香港映画のセリフの受け売り、やはりずっと家にいて暇で暇で、テレビ見るくらいしかやる事がなかったから）。

パソコン教室1——自己紹介

授業のプログラムを組んだ後に、再び連絡を取り合うようになった例のベテラン実習生（彼女も実は数年間の社会人経験があるので）の仲間（ここからは彼女のことを指導員と呼ぶことにする）と色々打合せをしたのち、ようやく開催する運びとなった！

授業の時間は午後2時から5時までで、1回目の授業の準備では、興奮しながらずっとわくわくが止まらず、それから教育用機材や撮影機材などが多数

ホームレス支援ステーションに届いた。授業に先立ちお昼頃ぐらいに現場に到着し、機材と会場の準備を始めたが、私のパートナーの指導員は本当にイベントが上手で、彼女は台湾語（公用語である中国語に対して、台湾現地の方言）が下手だったけれど（多くのホームレスの方は台湾語をしゃべる）、授業の雰囲気はいたって良く、なおかつ絵や写真の切り貼りのDIYは面白く、参加者同士のコミュニケーションもうまく取れていた。ただ後で気づいたけど全然授業を聞いていないホームレスの方が何人かいて、ずっと廊下で大声で雑談したり怒鳴ったりしていて（どうもだいぶ飲んでいる）、さらに救世軍スタッフの事務室に乗り込もうとしていた。最初は他のスタッフが止めていたけど、皆さんそれぞれ仕事があるから（民間団体は大体人手に余裕がない）対応しきれず、私は事務室の異変に気が付き急いで現場に駆けつけた。

事務室にはべろべろになった3名のホームレスが1名の女性スタッフに怒鳴りつけていて、私は止めに入った。そうこうしているに午後5時も回ってしまい、私も負傷してしまった。細かくは書かないが、1回目の授業が平和に進んだ一方で、トラブルも勃発した。

平和に進んでいる授業の方についてだが、1回目の授業の予定は以下のようなものだった。まず画像や写真を、A4の紙に切り貼りして自己紹介をし、その後順番に壇上で発表してもらおう。指導員が参加者の発表の中から、類似点や相違点を見つけて情報整理する。次に切り貼りした紙をパワーポイントに例え、一つ一つのパーツとその機能を説明する。その後参加者たちのパソコン操作に関する基本能力（勉強したことあるか、パソコンの使用経験あるか挙手で調査）を整理し、参加者同士がパソコンの起動、ソフトウェアを開いてキーボードで“私が今言いたい言葉”を入力してもらい、入力のがうまくできない参加者には、参加者同士で協力し合ってもらおう。最終的には一人ひとり入力した内容を発表する。

1回目の授業が終わったら、私はほとんど力仕事しかやっていないけど、指導員が真剣に記録してくれたおかげで参加者たちのパソコン教室への感想が忠実に残っている。

指導員の記録

7人のうち2人は最初からそのままペンで書きだした。切り貼りや自己紹介の意図が未だに飲み込めず状況を把握しようとしている様子で、また自分に自信がないか、自分をどう表現するかに迷っている様

子。彼らに丁寧に説明し理解してくれるのを待ちつつ、絶対こうしなさいとかなからねと改めて説明すると、あの2人はやっと体を動かしてくれる気になって真剣に参加してくれるようになった。最初からずっと様子見のもう1人も、その後の自己紹介で大変積極的になり、色々話してくれたので、やはり彼らは伝えることに対する意欲と期待はあると思った。7人の中にはある程度の教育水準があり、基本的な教養のある方もいるが、やはり参加者同士のコミュニケーションが少なく、楊さんや救世軍スタッフとの会話はあるものの、参加者同士の会話、ふれあいはあまりなかった。

参加者の自己紹介の時も、さまざまな側面からの話があり、例えば子供の頃の思い出や、好きな風景、宗教、社会への期待、生活習慣、趣味など内容は非常に多様で豊かである。総じて参加者たちは非常に真剣だった。

ただ参加者一人ひとりが異なる表現力、意欲、性格を持つことを考慮して、今後からは聞き手側により伝わりやすい素材、例えば写真などを使いながら、参加者自身に自分のストーリーについて語ってもらうこともやってみたい。

パソコン教室 2——子供の頃の思い出

一週間後の2回目の授業は、地下室で開催することにした。なぜなら前回1階で授業した経験を踏まえると、シャワーを浴びに来た方や、洗濯中の方、炊き出し待ちの方や、医療支援待ちの方々も多く、参加者が影響を受け安いという問題があった。地下室にいるだけで外部的な影響を大きく回避することができる。

今回の授業では「子供の頃の思い出」をテーマに、最初は簡単な振り返りを行い、一週間前の記憶をまず呼び覚ましてもらい、前回の進行や、切り貼りで自己紹介をしたことや、パソコンの電源の入れ方やキーボードの入力を思い出させた。

今回の狙いは、創作を通じて子供の頃の思い出を辿ってもらい、さらにそれぞれ用意された絵の中から3枚を選んでもらう。直感的に、子供の頃の思い出と結びつくようなものを選んでもらう。さらに前回と同様参加者にパワーポイントのスライドをイメージしてA4の紙に貼りつけてもらい、と同時に参考となるパワーポイントのスライドも見て、参加者に前回の内容を思い出させ、スライドを作って発表してもらう。

発表のスライドにはタイトルと内容を入れてもらい、さらに選んでもらった3枚の絵をスライドの中

に適切な位置に入れてもらう。タイトルを考えてもらったうえで、それに沿って内容をどう紹介するかを考えてもらう。もし参加者が3枚の絵をそれぞれ3枚の用紙に乗せたい、つまり3枚のスライドにしても問題ない、発表に使った作品は都度に写真を撮って保存し、将来スライドを作成する時の素材とする。

最後に参加者が作品をもって壇上にあがって自身の子供の頃の思い出について発表する。例えば、誰と、一緒になにをやり、いつ、どこで、そこになにがあり、なんの動物がいて、どういう環境だったのか。

最初の恥ずかしさや気まずさが抜けたら、多くの参加者が自身の子供の頃の思い出について触れると、非常に感慨深くかつ淡い哀愁を漂わせつつしみじみと語る（過去に戻れる人なんか世の中にはいないもんね）！

授業の最後では実際にパソコンを操作してスライドを作ってもらうため、電源を入れる場所を確認し、パワーポイントのソフトウェアの起動をまずやってみてもらう。指導員はプロジェクタースクリーンで逐一操作の方法を見せ、パワーポイントの表紙の作り方、スライドの背景のデザインなどを紹介した。参加者はスライド内にタイトルを入力し、さらに内容も入力する。各参加者が入力し終わったらデータを保存し、さらにデータ保存の場所とファイル名を（XXXスライド作品）を確認した。最後には、参加者に来週からは実際撮影した画像をパワーポイントの中に取り込み、1~3ページ程度のスライド作品として完成してもらうことを予告した。

パソコンの操作と切り貼りの作業、さらに自信に関する発表などさまざまな内容がてんこ盛りで、授業は終始活気に溢れていた。ずっとスクリーンを見つめ続ける必要もなく、もちろん中でもいくつかの課題が見えてきて、例えば注音への理解度には、個人差が大きく、パソコンのキーボードでのそれぞれの注音の位置を正確に覚えてもらうことはさらに困難である。

私も授業が終わったら暇というわけではなく、夜家に帰ったら彼らの切り貼りした作品を撮影してスキャンしてデータとして保存し、さらに参加者ごとにファイルを作りまとめて管理するようにした。最終的にはパワーポイントの「電子人生履歴」なる資料としてまとめてもらうことになる。

私のパートナーとして、このパソコン教室を担当してくれた指導員には本当に感謝でいっぱいだ。彼女が毎回の授業後に丁寧に記録を取り、反省点を記して全部私に渡してくれたおかげで、今こうして思

い出を懐かしむことができる（私も年を取って、記憶力がだいぶ衰えてきているもので）。さらに指導員は各参加者の報告も詳細に記録している。

指導員の記録

王さん

タイトル「中華伝統」。作品の中に古い屋敷、隣のおうちの玄関や水牛を引っ張っている子供など、なんとなく『家』をイメージして具体的に表現している。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして、「古い屋敷には誰が住み、ここはどこなのか、今でも誰か住んでいるのか？建築物は現存するのか？古い屋敷への思いや印象、隣人との関係はどのようなのか、どういうお隣さんなのか、子供のころは牛を飼っていたか？牛に対する記憶や思いは？夕暮れの時はいつも何をしていた、自分自身にとって伝統の意義とは？」

呉さん

タイトル「小さい頃家にいるとき」。友達と田んぼで遊ぶ。絵としては躍動感があり、遊んでいる、仕事している、さらに素朴な感じ、苦勞も感じられるが楽しそうな雰囲気がある。呉さんは小さい時はきっとガキ大将でよく子供を集めて遊んでいたに違いないと想像する。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして、「子供の頃の家庭環境はどうだったか、稲作の収穫はどうだったか？いつ収穫するのか？何人ぐらいでやるのか？取ったお米は家でも食べるのか？お米以外に、家で他の作物も作るのか？昔はどこで魚を採ったか？泥遊びもするのか？服を汚してお母さんに怒られなかったか？魚採りの他にはどんな遊びをするか？家はどこなのか？環境は変わったのか？」

一週前の自己紹介の時に呉さんは果物の樹の写真を選んでいたので、きっと自然に対して良い思い出がたくさんあるのだろう。

翁さん

タイトル「コストダウン、品質後退」。翁さんの図面および2週間の発言内容では、社会に伴う価値観の変化、商売人などが金稼ぎのために不当にコストダウンして品質の劣化などに関する嘆きが多かった。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして、「翁さんは若い頃から正義感が強かったのか、助太刀をする人なのか？翁さんの人生の中でなにか

不公平な目にあったことがあるのか？憧れる人や目標とする人はいるか？翁さんのご両親の教育方針や、同窓、同僚との人間関係はどうだったか？日本統治時代の教育を受けたことがあるか？そこからなにか影響を受けたのか？」

陳さん1

タイトル「子供の頃の三重奏」。低、中、高の3つの音色で3枚の写真を表している。一枚一枚の写真には明確な言葉が添えられていて、台所と食事、お寺、水遊びをする子供である。陳さんの見た目はクールだが、常に周りの状況を丁寧に観察しつつも、内面的には豊かな感情も持っている。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして：陳さんは音楽の学習または演奏経験はあるのか？また陳さんが述べた低、中、高の3種の音色にそれぞれ対応した写真の意味とそのチョイスの理由は何か？家族または自分はどのような時にお寺に行くのか？現在でも行くのか？

陳さん2

タイトル「子供の頃の休日」。彼は参加者の中で唯一自分のイラストで表現する人である。子供の頃の休日というタイトルの横に笑顔を書き、人形劇や、けんけんばや飴玉の写真の他に、糖葫蘆（フルーツの飴がけ）のイラストも描いている。テーマは遊びや飴玉に注目していて、元気で生き生きとした記憶が読み取れ、甘くて、楽しい、まさに陳さん本人のようなイメージで、とても元気な感じが感じられる。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして：子供の頃ではどんな時に飴玉がもらえる？ご両親またはその他の親戚からお小遣いもらって買うものなのか？自分で貯金して買うのか？虫歯になったことあるか？けんけんばで勝ったり負けたりする場合はなにかご褒美やお仕置きあるのか？人形劇の経験はあるか？好きなキャラクターは？どの作品が好きか？

楊さん

タイトル「無し」。夕日を背に遊んでいる子供と浜辺で水遊びをしている女性の写真を選び、他はすべて自筆で書いている。内容は思いついたことをそのまま書いている印象である。時には自分は台湾の某有名企業東X士の創設者の陳X豪氏が経営していた建設会社の被害者であり、自分は親方だったけど下で働いている作業員に給料を払えない窮地に立たされたと言った、「この話をすると涙が出る」と語った。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして、「陳X豪が1983年に東X士建設を設立して、会社

は2001年廃業となり社長も中国に夜逃げしたが、当時は楊さんが24歳と42歳の時だった。楊さんはいつから建設関係の仕事につき、いつから親方になったのか？当時の収入は？職人さんたちとの関係は？どういう風に管理していたか？陳X豪が夜逃げした後はどういう風に対応して生き抜いてきたか？」

蔡さん

タイトル「農村の楽しみ、忘れられない甘酸っぱい思い出」。母鳥とひよこの写真や子供たちがわらを背負っている写真を選んでいる。内容は大自然への感謝、満足といった感情、まさに子育てに“夢中”な母鳥のように、田んぼの中にこぼれる汗水や笑い声が目に飛び込んできそうな雰囲気を感じられる。呉さんが表現しようとしているものと類似点が見られる。

指導員がさらに詳しく知りたいと思ったこととして「忘れられない甘酸っぱい思い出とはそれぞれどんな出来事なのか？家もしくは近所にニワトリを飼っているのか？卵は産むのか？どれぐらいの卵をどれぐらいの頻度で産むのか？田んぼでの農作経験、思い出を今思い返すとどういう感じなのか？」

指導員の授業後の観察記録

王さん

確か今回が初参加である。歯が欠けていて、最初は酒を飲んでいるのかと思ったが違った。物静かであるが、ビジュアルの表現が豊かで、感情が込められているように感じられる。次週も来るかは分からない。

呉さん

大自然への感情、思い出を多く読み取ることができた。指導員は時折呉さんの発音をうまく聞き取れない(台湾語の関係で)。呉さんは目立ちたがらない人なので、発言を積極的に促すとよいかもしれない。

翁さん

ハットをかぶった、上品なおじいさまという感じで、見た目からはホームレスとは全く想像がつかない。社会の動向にも関心があり、ある程度の教育水準であるように思われる。

陳さん

先週は画の表現なので多少戸惑いはあったようだが、今週はちゃんと参加者たちの中にうまく溶け込み、興味も示している。

陳さん

背が高く、落ち着いた雰囲気、積極的に参加

し、声大きい。視点が明確で、伝えることに長けている。彼はイベント終了後に申し訳なさそうな顔で指導員に「2時間連続の授業なのでつい居眠りしてしまった。次からはぜひ休憩時間を入れてくれると嬉しい」と声をかけてくれた。

楊さん

酒に酔って、しっかりしている時もあるが意識があちちに行っている時もある。さらに徒党を組み騒ぎたがり、こうしたイベントは彼にとって格好の舞台である。しかし進行に支障が出る恐れがある。参加者はみんな彼に寛容で受け入れているが、指導員にとっては悩みの種で、楊さんを議論に引き戻すのにかなり苦労させられた。

蔡さん

物静かで、指導員の印象が薄いため、次週からはより頻繁に話しかけるようにしたい。

反省と改善点

1. 参加者の多くはおおむね60~65歳で、最年少が56歳、最年長が73歳である。多くの方は見た目からはホームレスには見えず、ある程度の教育水準と社会経験があるように感じられる。
2. 今回は地下室で授業を行った。最初の1時間で創作の作業をしてもらい、その後50分間でパソコン操作をやってもらう予定だったが、前半の創作と発表の時間が長引いてしまい、100分間もかかってしまった。時間の節約のために、休憩を入れずにそのままパワーポイントの説明に入ったためか参加者にはだいたい体力的につらかったようである。
3. 参加者の年齢を考慮し、間に必ず休憩を入れるようにする。さらに地下室は風通しが悪く眠くなりやすいため、休憩がないと余計居眠りしやすくなる。
4. 時間のコントロールがうまくできず、準備しておいたパソコンを使うタイミングを逃してしまった。今後の自由創作の時は、パソコンを一切使わないようにした方が良いかもしれない。参加者たちはここの2週間、自分の物語を語ることにはみな真剣にとりくんでいるので、これからは参加者同士の会話と発表時間をもう少し伸ばした方が良いかもしれない。つまり創作・発表+指導員がパワーポイントの機能紹介に特化した授業と、パソコンの操作練習に特化した授業を分けて考えたほうが良いと思う。
5. 創作・発表の際には、現場の雰囲気づくりの一

環として音楽を流すことも考えられる、そうすることで地下室での淀んだ空気も多少軽減できるかもしれない。

6. パソコン操作練習の際は、一つ一つの操作を手取り足取り進めていった方が分かりやすいという提案がボランティアよりあった。指導員は指導用のパワーポイントを用意しておき、参加者のための参考教材とする。
7. 楊運生さんより分かりやすい言葉を使ったほうがよいとのアドバイス。例えば『タイトル』の代わりに、5～6字ぐらいの実際のタイトルを示した方が分かりやすい。
8. おじさんたちは台北出身者が多く(台北、北投、南港、中山区)、高雄の方もいる。
9. 4/29のテーマを“私の労働経験”として設定した。楊運生さんによればホームレスの方々は旋盤工、プレス工、射出成形、建築関係(現場監督、職人、土木、日雇い)、プラカード、印刷、重労働、清掃業などが多い。

救世軍のケースワーカーには一人ひとりの写真と集合写真を用意してもらい、パワーポイント作成時の素材写真として使用する。

パソコン教室 3——操作練習

第3回のパソコン操作練習の内容は、前の2週間での参加者による切り貼りの作品と自己紹介の内容を、パソコンを通じて表現することである。救世軍のケースワーカーが事前に参加者の作品をスキャンして画像データとして保存し、さらにそれぞれのパソコンのデスクトップに置いて、一人一人の名前でファイル名を設定しておいたため、参加者には分かりやすかった。その後は指導員が一つ一つ丁寧に手順を説明し、彼らは「バンドラのディスク」を開いてみた。参加者のレベルには大きな個人差があるため、私たちは指導員というより指導チーム(指導員、私、救世軍のケースワーカー、ボランティア)が全員で指導に入り、働きバチのように多くの参加者の間を行ったりきたりした。しかしカタロC(注音)も読めない方には、やはり指導員がそばで入力の手助けをする必要があり(一部の参加者は初めて自分の名前がパソコンのスクリーンに出てきたのを見て感無量のような感じ)、さらに最初に心配したように年齢の問題や、視力の後退、障害によって操作が困難であるなど多くの課題が浮き彫りになった。やはりパソコン教室としては、長時間の授業は控えたほうが良いと思われる。

指導員の記録

授業の最初に、新しく入った参加者に自己紹介してもらおうことを忘れたのが反省点である。パソコン用語はやはり専門用語になりがちで、例えば“アクセス”といった言葉は、参加者には伝わりにくいのので、反省すべきである。

今回は、パソコン教室が始まる前に、まずスタッフの観察に基づく反省や参加者のフィードバックに関する意見交換の時間を設けても良いかもしれない。またパソコンに慣れている参加者と不慣れた参加者の席を隣同士にすれば、早くできた方は時間が余れば、自然と不慣れた参加者を手伝ったりできるので、参加者同士のコミュニケーションの向上や、達成感の醸成にもつながり、スタッフの負担軽減にもなる。指導員としても全体の状況の把握がしやすくなる。

休憩時間は参加者にとって非常に重要である。

授業内容について

時間になり参加者を会場に誘導して、前回の内容を振り返った。切り貼りイラストで子供の頃の思い出を記述した内容について、ポジティブに積極的な参加姿勢とその物語の内容を評価した。さらに一人ひとりの内容について簡単なフィードバックも述べた。その後は本日の授業内容を簡単に述べ、まず参加者たちに手順通りにパソコンの電源を付け、パワーポイントを開くように指示した。

参加者に操作手順の手本を見せ、パワーポイントのレイアウトと画像の挿入と文字の入力などのやり方を教えた。その後は参加者たちに各自自分の作品を編集してもらった。また、自己紹介の写真を撮っていなかった人については、写真撮影とファイル保存をスタッフに依頼した。自己紹介と子供の頃の思い出のタイトル文字と画像の編集作業については、指導員が3人を担当し(うち1人はパソコンに比較的慣れている)、救世軍ケースワーカーとボランティアの方がそれぞれ2人ずつを担当して一緒に着手した。前回作成した用紙を返却して、スライド作成時の参考にした。

参加者は文字、画像をどの位置に、全体をどう配置するかを決め、指導員たちはただ技術的な支援を行い、物語の内容などには介入しないようにした。

各参加者は入力が終了したらデータを保存して、さらに保存先とデータやファイル名を記録した(XXXスライド作品)。

最後にはしっかりと電源を切った。

指導員の授業後観察報告

前2回の経験を踏まえると、参加者はパソコン操作と自身の物語を発表することに相当興味を示しており、本来ならパソコンと発表はそれぞれ授業の半分の時間を使う計画だったがどうしても長引いた。そのため、今後はパソコン操作と物語の発表は分けで行う。

本日の出席者数は11人、そのうち5名は新規参加者で、楊さんは欠席だった（耳よりの情報によると前の夜飲みすぎたらしい）。座席は参加者が自分で決めた。全体の状況として、楊運生さんの観察によれば参加者の半分はパソコン操作の上達が早く、次の指示があるまで時間を持て余す場合もある。

参加者の平均年齢は60歳以上で、視力や手の動きにも年齢の影響がある。特にキーボードの配置はウタロ口順(abcd順)ではないため、参加者が入力する際は基本的にスタッフが横にいて協力しないとうまくいかない。例えば2名の参加者が1台のパソコンを共同で使う場合は、指導員は新しい参加者に協力するよう指示する必要がある。

一部の参加者(例えば蔡さん)は常にマウスを握りしめ左クリックを必要以上に連打する癖があったり、ボランティアの方の観察によるとドラッグする操作や、ダブルクリックをうまくできなかったりすることもわかった。

間に10分間の休憩時間を設けることで、参加者たちはパソコンの学習により専念できるようになった。

本日の参加者のほとんどは時間までにスライド作成の予定を終え、タイトル入力、画像と写真の挿入、文字の入力、電源を切る等を完成することができた。

パソコン教室 4——私の労働経験

- 1人3枚ずつA4の紙を配り、3枚それぞれのタイトルを『最も達成感のあった仕事』、『最も苦勞した仕事』、『自分自身に言いたいこと』とし、参加者にそれぞれ3つのテーマについて紙に記入してもらった。記入する位置は制限しない。
- 参加者は『最も達成感のあった仕事』、『最も苦勞した仕事』について、パワーポイントのソフトウェアに備え付けの画像の中か適当なものを選ぶ。無い場合は、文字や、手書きのイラストなどで代用する。
- 前回のイベントと同様、参加者はA4の紙をスライドのレイアウトと見立てて、タイトルの下に画像とそれに添える言葉を入れた。
- 『自分自身に言いたいこと』には、過去の自分や

今の自分またの将来の自分のいずれに対してでも構わない。

授業後観察と反省

陳さん

最も達成感のあった仕事：建築現場の副監督を務め、一日で2000元程度の稼ぎがあった。この仕事は4、5年ぐらい続き、その後建築業界の技術進歩などに伴い淘汰され、行き場を失った。(指導員：渡された設計図面通りに建物を作るとのことだね、陳さんは照れながら、“今風に言うとなんかエンジニアかな”と返した)

最も苦勞した仕事：プラカードの仕事、派遣会社から指示が来て、月平均の出勤日は約20日。プラカードを街中で出している時は雨風にさらされたり、30度を超える熱い環境の中で、トンネル口にずっと立ちっぱなしだったりした。一日の労働時間は8時間で、昼には30分の休憩時間があるが、その際は周辺のお店で食事をとったり持参のお弁当を食べたりする(指導員：経験の積み重ねから、プラカードの現場周辺の施設や設備を事前にチェックしておく習慣が身につく)。トイレに行きたいときはガソリンスタンドや、コンビニを利用するが、そういう場所がない場合は隠れて立ってする。

自分自身に言いたいこと：それでも生きていかなきゃ。

蔡おっちゃん

最も達成感のあった仕事：10代から印刷工場で技術を学んで、さまざまな知識を身につけ、(指導員：実に興味深い)、その後兵役に行くまで見習いとして1、2年働いた。その後は新竹関西の企業農場で働き、ニワトリやブタの餌やり、外国人労働者の管理などをしていた。

張さん

個人的な背景：28歳の時に、父親の関係で身分証を押しえられたため仕事を探すことが出来なかった。さらに体も弱く軽い労働しかできない。オンラインゲームにも一時期はまっていた。

最も苦勞した仕事：プラカードの仕事をしたが傷に負担がかかるため2週間しか続かなかった。飲食店での皿洗いの経験もある。

蘇おっちゃん

個人的な背景：51歳、ホームレス歴は1年と少し。小学校卒。台東馬蘭の出身で、両親は既に他界している。10人兄弟で、うち姉が6名。一時期中国で働

き、中国人の女性とも付き合っていた。自ら社会の底辺と思いつつも、お金がなくとも楽しく生きるのがモットーである。

最も達成感ある仕事：10代の時に金職人となり、アクセサリーなどの製作に取り組んでいた。この仕事は3年4カ月（指導員：一人前の職人となった）続き、その後兵役についた。関連分野の技術進歩により、職人の就労機会がどんどん失われたため、プラスチック加工の仕事に転職し、さらに10数年も続いた。職業病として老眼などにかかっている。

王さん

個人的な背景：養父母ともに他界、実の父親は45年前に他界。実の父親は社会的地位のある人物で、遺産を受け取るために今でも頑張って交渉している。腹違いの弟が血液癌となったが、王さんは自身の身体状況やその後の体への負担を考え、弟への骨髄移植を断ったとのこと。

最も達成感のあった仕事：軍人としてのキャリア20数年、南、北イエメンの空襲などにも参加。

最も苦勞した仕事：プラカードの仕事でよくトイレのことで困り、その際は大体路地裏ですます。大きい方を済ましやすいうように基本いつもジャージを履いている。葬儀場の隣でプラカードを立てて、バイクが突っ込んできた事故に遭ったり、プラカード立てていると警察の取り締まりにあたりする（その場合の罰金は建設会社持ちである）。

自分自身に言いたいこと：社会は不公平だ。いつかは労働市場に就職機会を増やせる能力を身につけ、失業に困る人を助けたい。

指導員による授業後記録抜粋

1. 出席者数7人、うち新規参加者が4人である。救世軍ケースワーカーの観察によると、翁さんは今回の授業でパソコンの操作を学ぶことを期待していたらしい（今回の内容は前回指導員から予告していたのだが）。翁さんのパソコン教室への強い興味と学習意欲がうかがえる。楊運生さんが救世軍ケースワーカーに、翁さんにパソコンを触りにいつでも救世軍に来るようにと勧めてはどうかとアドバイスした。週一回のパソコン教室では進み具合も遅くなるため。
 2. 蘇さんと王さんはともに初参加であり、隣り合って座っていた。蘇さんは前からよく救世軍に来ているが、王さんは久しぶりに顔を出した。二人とも自己紹介が得意で、語ることに長けているため、自身の人生について細かく色々話をしたが、指導員としてはスムーズな進行のため適当に区切らざるをえなかった。
 3. 蘇さんと王さん共に最初は“私の労働経験のスライド”の作成についてやや抵抗感があったようだ。蘇さんは“仕事は楽しい”から、わざわざ紹介することはないと言いつち、王さんは食べるものと住む場所があれば十分と言った。しかし進行につれて、スタッフからの説得もあり、二人は授業の場にも慣れてきたところで、最後にはそれぞれ自身の仕事の経験を聞かせてくれた。蘇さんは小児麻痺で右手が不自由で、字が書けないため支援が必要である。
 4. 張さんはイベント参加者の中で最も若く、話すスピードは遅いが、授業には非常に意欲的に参加している。
 5. 陳おっちゃん：毎回非常に前向きに参加し、なおかつ的を得た発言でイベントを盛り上げてくれる。
1. 反省と改善点：楊運生さんの指摘によれば、蘇さんと王さんは当初オブザーバー的な位置づけだったが、紙を配って参加者たちに創作を開始してもらった段階で急にものを書くように指示されたため、何かの“調書か記録”ではないかと警戒心が芽生えた。そのため蘇さんは最初に私に“どこの団体の人間か”と確認したのだった。これは貴重な経験である。このことはホームレスの方々が利害関係にたいして敏感であるということを示していて、指導員としては授業内容の計画についてきちんと伝える必要がある。
 2. 王さんは当初、授業のなかで自身のニーズについてばかり話しをして、仕事の経験を教えてという指示をあまり相手にしなかった。一方張さんは、若くまた身体的な問題もあって仕事の経験が少なく、あまり議論に参加できなかった。楊運生さんのアドバイスとして、張さんはゲームが好きだからそれをスライドの素材にしてみてもいいこと。やはり参加者の個人的な特徴や興味などをうまく引き出すことにより、授業の活性化と発展に繋がると考えられる。
 3. 以上の点を踏まえ、スライドの内容は必ずしも子供の頃、仕事と関連づける必要はなく、参加者が参加意欲を示してくれるような要素に着目する手もある。なにより“楽しい”というのが最も重要である。
 4. 7人の参加者の中で少なくとも4人にプラカードの労働経験があり、全員が口をそろえて大変だ

と言い、そこからトイレをどうしていたかという共通の話題が生じた。王さんのプラカードにまつわる小話も、一件何の変哲もないプラカードの仕事の話に少しだけ面白みをもたらしてくれた。

5. 数回のイベントでの観察から、やはりホームレスの生活習慣からか、授業中でも落ち着かず、ずっとうろろしている人もいる。そのため参加者同士の関係性もなかなか醸成されないままである。やはり救世軍はあくまで社会サービスを受ける場所と認識されているのか、そこで人間関係を築くことを求めているのかもしれない。

今回は、ほとんどの時間をパソコンの操作、スライドの作成とパワーポイントの紹介に費やした。指導員たちも個別に入力や、スライドの編集などの指導に入り、さらにその場の雰囲気落ち着かせることも重要な仕事だった。

パソコン教室5——パソコン操作練習

今回も継続して参加者たちに文字と画像作品に取り組んでもらい、自分たちの考えをスライドで表現してもらった。皆さんそれぞれパソコン操作のレベルがばらばらで、授業に参加したり欠席したりで指導員たちも色々苦戦を強いられている。

指導員による観察の概要

第1回のイベントから欠かさずに継続している参加者は2名で、蔡さんと陳さんである。授業開始前に1階でもう一人の陳さんを見かけたが、授業が始まって地下室のパソコン教室に降りてこず、原因がよくわからなかった。救世軍ケースワーカーによると彼は前回ちゃんと休みを申し出ていたとのこと。

陳さんは遅いものの文字入力ができる。そのため、指導員は前の口頭での発表とパソコン操作の状況から、陳さんは比較的速くスライドを完成させられるものと期待していた。しかし、スライドの作成中はスライドの機能や基礎的なパソコン文書入力へに不慣れなため、かなり遅れを取った。やはり陳さんにはまだスタッフからの支援と協力が必要だと感じた。陳さんは律義にかばんを床にキレイに置く習慣があり、そこから彼は几帳面でスライドの細部へのこだわりで時間を要しているとも考えられる。

蔡さんは授業の中ではいつも帽子を目深にかぶり

存在は目立たないが、毎回の授業にきちんと出席している。スライド作成に関してはスタッフの支援の下で、自身の考えと経験をきちんとスライドの中に反映するようになった。所定の作業が終わったら席で待機することが多いが、他の参加者との会話は少ない。スライドの内容は子供の頃の思い出も労働経験も時も農村の画像を選んでいことから、農村への愛着がうかがえる。

張さんは今回で第2回の参加である。指導員が好きなネットゲームのキャラクターの画像を探してきたことに喜んでいて。指導員が協力して作成したスライドを自ら削除したため、その理由を尋ねると、彼は自分の手でもう一回パソコン操作の練習がしたかったと言った。張さんは、文字入力はできないものの、マウスの操作は相当慣れている。授業の後で、先生は綺麗だと褒めてきたので、スライドを削除したのも注意を引くためだったのではないかと推測される。

楊さんは後半になってやっと出てきた。頻繁に隣の参加者に話かけたり、紙の上に歌詞を書いたりしていた。この授業は楊さんにとっては、勉強というよりは雑談や息抜き場として認識されているかもしれない。

他の3人の参加者はみな新規の参加で、1人は後半は1階の炊き出しに行きたいと申し出たため途中退席した。残りの2人は指導員たちの指導の下で、スライドの製作を無事終えた。

イベント参加者はパソコンの操作時において、質問するのが恥ずかしい様子である。それから人生に関する話を語ってもらう時も、参加者も普段あまり発言の場がないせいか、途切れ途切れに話したり発言が短かったりすることがある。

指導員による反省と改善点

救世軍のケースワーカーには前回陳さんが作成した前次子供の頃の思い出のスライドデータをパソコンの中に入れるようお願いした。そうすると次回陳さんが来たら前々回のスライド作成の続きをそのまま始められる。次回楊さんがまた参加しに来たら、彼はどちらかというパソコン操作よりも他の参加者との会話が目的なので、他の参加者とペアを組んでスライドの作成を課するのも良いかもしれない。

蔡さんの過去の人生経験と農村への感情について、もっと多くの農村に関する画像を用意するとよいかもしれない（笠、農具など。さらに例えば除草をどうするか？農薬は使うか？どういう作物が作りやすいか、台湾農業の現状への理解など様々な話題

を引き出すとよいのでは)。

参加者に対して画像に沿って語るよう、そしてスライドとして編集するよう指導するにあたっては、ホームレスの方のライフストーリーに寄り添うスタッフの技量が問われる。フィールドに対する理解と経験の蓄積が役に立つのはもちろん(無口な参加者でも楊運生さんならすぐにくさん話を聞き出せる)、頭の回転も重要で、例えばこういう聞き方がダメだったら聞き方を変えてもう1回聞くということも必要である。

パソコン教室6—スライド作成作業の続き

とにかく、それぞれの参加者の作業に寄り添ってキーボードとの奮闘に協力した。この回に関しては授業の内容より指導員の反省と観察の方が読み応えがあると思う。

注意事項

これまですでに5回の授業を実施しており、これから残り3回の予定である。前の2回の授業の経験から、スタッフは大部分の時間を参加者の入力練習やキーボードの操作などへの手助けに費やしている。第8回の授業では簡単な成果発表会を開催する予定である。さらにそのインセンティブとして救世軍に景品を用意してもらう予定である。残りのイベントではそれに向けて考えなければ。

5月14日の授業では、継続してスライドを作成し(子供の頃の思い出+労働経験)、さらに新たに3つのテーマ(1.私にとって一番大切なもの、2.未来への期待、希望3.私が一番欲しい景品)を追加した。各テーマについて:私にとって一番大切なものでは、物語でも、文字でも、画像でも良いのでスライド作成に入る前に、一度参加者全員の前で『私にとって一番大切なもの』について語ってもらう。

最終目標は“完成したスライド”を使って発表してもらうことなので、授業時間内においてはスタッフができるだけ協力をする。参加者が授業時間外に作業したい場合は、平日救世軍に来て進めても構わない。イベントの中ではより多くの時間を参加者自身に話してもらうことに使い、これをもとに最終成果のスライドの構成を決める。

授業は前半と後半に分けた。前半は、前回楊運生さんの協力のもと参加者が完成させたスライドを例として見せた。スライド作成時の構成の参考とし、またスライドの作成は決して難しくないと他のメンバーに印象付け、あくまで自分の素晴らしい人生経験をいくつか切り取って物語として編集するだけで

あると認識させた。前半の時間は、新規の参加者がいる場合は、他の方々と同様のタイトルでスライドを作ってもら(自己紹介、子供の頃の思い出か労働経験のうちどちらか一つ)。古参の参加者には今までの各テーマのスライドの提出が必要である(子供の頃の思い出と労働経験などを一人ひとりの専用ファイルに保存)。

後半では指導員がまず『私にとって一番大切なもの』のスライドを見せ、皆さんの思考を刺激した上で、そこから参加者に3つのタイトルについてそれぞれ考えてもらった(1.私にとって一番大切なもの、2.未来への期待、希望3.私が一番欲しい景品)。

見たところ、1名のスタッフにつき大体2名の参加者の面倒を見ないとうまく回らない状況である。新規・古参の参加者問わずほぼ同様な協力と指導が必要で、しかもほぼ毎回新規の新参加者が来る(継続して参加するとは限らない)。これは指導員にとって大きな挑戦である。今後、救世軍と新規参加者の扱い、あるいはグループ分けについても検討が必要である。

第7回のイベント前半もやはりスライド作成がメインだが、後半では壇上で発表の練習をしてもらいつつ、参加者と話し合いながら第8回の成果発表会に向けた評価の基準を決めていく。

パソコン教室を踏まえて見えたライフストーリーをまとめたスライド内容

第8回授業の目標である成果発表の実現に向けて、第6~7回では、スタッフは参加者が自身の物語をうまく完成させスライドの内容に反映してもらうため、できるだけ入力など必要な協力を行う。

自発的に入力の練習をしたい参加者は平日に救世軍のパソコンを使ってもらう。

授業後観察と反省

陳さん

指導員の協力のもとで、スライド作成時に細かい部分を注意しながら、操作の不明点も質問して、几帳面な性格を見せている。自己紹介、子供の頃の思い出と労働経験のスライドを無事完成することができた。面白いことに、自己紹介のページは空白のままにし、自分は“無一文”と述べた。

蔡さん

いつも通りに静かに座り、この日はスタッフが人手不足のため、前半はあまり目が届かなかった。後半はボランティアが積極的に協力し、子供の頃の思

い出と労働経験特に農業経験について詳しく入力した。蔡さんに対して、次週には是非自己紹介及びその他タイトルも完成させようねと励ました。

張さん

事業開始前はわくわくした様子で、事務室を通ると指導員にあいさつに来たり、パソコンの準備にも協力し、笑顔が絶えなかった。しかし授業開始から10分ほどで、スライドの作成に対して明らかに苛立ちを見せ、“私には何もない、ただ空白”と嘆いた。指導員が彼を励ましつつゲームについて書いたらどう？興味のある画像をまず探してみてもねと提案したりしたが、張さんは一向に進めようとせず、その後すぐに退席した。

呉さん

授業の前後には、いつも自分はパソコンができない、次回からもう来ないと言う。ただボランティアの方がスライドの作成に協力し始めたら、呉さんはパソコンへの抵抗を見せつつも、きちんと作成してくれている。

簡さん

唯一の女性、しかも比較的若い。パソコンに大変慣れており、ブログもやっていて、スライドの作成には意欲的であり、テーマにも興味津々である。天真爛漫で、自己紹介がうまくて、年長のホームレスに比べて明るく、年長の参加者を励ますこともある。指導員からは、継続的に参加するように促した。

邱さん

はじめての参加者である。最初の指導員の説明と紹介を聞くと、すぐに帰ろうとするそぶりを見せ、パソコンはできない、できるようになったらまた来ると言った。指導員や救世軍ケースワーカーの励ましを受けて、邱さんははじめて参加する意欲を見せてくれた。指導員がスライド作成に協力する中、邱さんは要領も良く、表現力も豊かで、選んだ写真を見るなり子供の頃の思い出や労働経験を次々と語り始め、スライドの作成も非常にテンポよくできた。楊運生さんが授業後半の協力を担当し、邱さんはもともと楊さんのことは知っていて、話し上手な楊さんだから、邱さんはなおさらリラックス状態になったようである。簡さんがスライドの発表している時も、邱さんは先輩風を吹かせながら簡さんに仕事を探さないかと2回も諭した。私の二の舞になるなという意味合いが読み取れる。

唐さん

最後まで参加し、救世軍ケースワーカーがスライ

ド作成に協力した。スライド発表時も邱さんとのコミュニケーションがよく、二人は経験が似ていることから、お互い今度も参考しようと励まし合った。

反省と改善点

指導員がイベント終了後に張さんに話を聞いたところ、彼は熱くてイライラしたと答えた。次回からまた参加するように励ました。

授業の開始時は、邱さんが自身のパソコン能力への不安を訴え、また張さんが途中退席したため、いささか不穏な空気が漂った。また呉さんも次回からもう出ないと言ったりしたため、参加者の達成感と動機付けのために、後半の授業開始前に、急遽段取りを変更して、参加者に一人ひとり自分のスライドを紹介してもらうこととした。参加者は皆集中して聞いていた。

ボランティアの方が呉さんと蔡さんに協力している中で、二人とも物静かで口数が少ない方なので、なかなか前に進まなかった。改善点として今後はより多くの話題を通じて会話を促し、決められたテーマでなくとも、二人の興味にあったタイトルに変えてもらっても良いと思った。

イベント終了前、指導員と楊運生さんから最後の成果発表会の予定と救世軍の方で景品を用意することを伝え、最終回への参加を促した。

パソコン教室 7

—1. 前半：スライド内の完成

—2. 後半：スライド発表の練習

ひたすらパソコンを見て、打ち、またパソコンを打つのに協力する。

指導員による観察の概要

授業開始前の参加者は多くなく、救世軍スタッフによると当日は他の団体が中秋節の手当を配っているため、出席者数に影響が出そうだとの情報があった。

陳さん

今は駐車場の管理人として働いており、今日はシフトを変えてもらってきたらしく、イベント中も時々着信があった。陳さんはパソコン学習へのモチベーションがあるため、自分で操作手順をノートに控え、授業にも集中している。指導員が授業に参加するのは仕事に影響あるかどうか聞くのを失念したが、また今度聞くことにした。陳さんとの関係維持の一環として、その生活や仕事への寄り添いが必要

だと考える。

蔡さん

前は複数回にわたり農村への感情や労働経験についてスライドを集中的に作成していたので、今回は自己紹介と一番大切なもの、未来への期待、希望、一番欲しい景品について着手してもらった。蔡さんは自分自身に言いたいことについてなかなか良い案がないようで苦戦している。蔡過去に授業終了後、作品の完成にすぐ達成感を感じているようで、昔バスの運転をしていた話などを自ら話してくれた。蔡さんの自己紹介のスライドでは、幅広い趣味を垣間見ることができ、文武両道であることがわかった。信頼関係を築ければ、もっと彼のいろいろな側面が見られるだろう。

蘇さん

2回目の参加である。今回の授業ではスライド作成に大変没頭している。お母さんへの思いや、謝りたい気持ちなどをパワーポイントの中に詰め込んで、お母さんに向けた言葉が多かった。さらに彼がいるお陰でイベントの中での感情的な交流には大きな促進効果があった。はじめて参加した時には、なぜか過剰に自己防衛をしていたが、そのうち自身の金職人やプラスチック加工の経験も話すようになった。指導員や楊運生さんも授業後に積極的に蘇さんに声をかけた(自転車や台湾一周について)ことで相当関係が良くなった。彼は非常に感情が豊かである。

林さん

蘇さんに“林ちゃん”のあだ名をつけられ、これが指導員と林さんの関係構築に一役買っている。林さん自身も面白がっている。林さんはすでにある程度パソコンができ、ネットも普段からやっているが、授業に合わせてちゃんとスライドの作成を進めている。

呉さんと陳さんは救世軍ケースワーカーとボランティアの方の協力のもとで、スライドの作成がある程度進んでいて、物静かではあるが、最後まで参加した。

黄さんはイベントの前半で退席してしまった。

反省と改善点

指導員はすでに毎回の授業に新規の参加者が来ることに慣れてきた。それぞれの参加者が1回の授業を通して一つの簡単なスライドを完成させ、そのことで達成感を得るという方向に目標をシフトさせた。また、リラックスでき、サポートティブでお互いにおしゃべりもできる(しかし無目的ではない)空

間にしようとしている。今回の授業では、最後に10～15分間を使い、一人ひとりの作品を紹介した。このようなやり方を2回にわたりやってみた結果、参加者同士のコミュニケーションと意見交換を促進し、達成感を得ることにもつながり、さらに参加者もよりイベントに溶け込め、パソコン技術の不足による緊張も解消できることがわかった。

今回はスライドの内容がある程度整い、かつレイアウトやデザインも進んでいて、古参加者の陳さんや蔡さんも自身の作品に非常に満足していた。

楊運生さんが提案した改善点として、次回5月28日のイベントではまず参加者に壇上に上がりスライドで発表してもらい、スタッフが採点して、さらに他の参加者が発表者に対して意見を述べ、イベント後半に時間があれば、言われた意見に対してパワーポイントの修正を行ってもらおう。今後の授業では、改善点としてパソコンによる文書処理の能力に焦点を絞った方が良いとのこと。

指導員の意見としては古参加者、例えば陳さんや蔡さんにはスライドのカラーコピーを用意しても良いという。

今回の授業では最後に参加者同士の議論・相互評価もやってみようと思ったが、やはり新規の参加者が多いこともあり、議論が弾まないことが想定されるため、最後は指導員が簡単に締めくくるとした。

時には活気を出すようにすることも大切だ。

パソコン教室 8——成果報告発表

当日は、私はもっぱらビデオを回していたのでほとんど覚えていないから、指導員の資料から振り返ろう！

授業前の改善提案

救世軍ケースワーカーに各回の授業で出来上がったスライドを整理してもらい、さらに授業に出席した経験のある参加者全員に発表会に是非出席するように声をかけてもらった。

救世軍からはさらに茶菓子、音楽、賞状、景品を用意してもらった。

指導員として提案したのは、一番熱心な人への皆勤賞(陳さんや蔡さんのように毎回必ず参加する参加者への励まし)、感情の発露賞(例えば蘇さん)、大胆賞(喧嘩の話や、プラカード仕事の立ち小便の話など)、最優秀作賞(パワーポイントの完成度が高い参加者)など。個人的には1-2つのタイトルのパワーポイントをきちんと完成した人なら全員奨励に

値すると思う。

賞状を出すのは、これによって娯楽性、緊張感、クライマックスを演出することが目的である。しかしホームレスの方一人ひとりのライフストーリーはどれも重みがあって、複雑なものであるから、私的にはこれは単純に“採点”できないものと感じた。従って、賞という形式を借りて授業を面白くし、また参加者に達成感を与え、ついでに役に立つ物を持って帰ってもらうことが目的である。

指導員は現場の数少ない女性として、コスプレとかがして場を盛り上げるとかの提案もあった。それより評価員たちが座るテーブルを救世軍ケースワーカーに緊急に調達してもらった。

指導員は、今回のイベントでは最終的にパワーポイント修正の時間を設けず、方針としては参加者に今後も継続してパソコン教室に来て完成してもらうことを提案した。

今回のイベントでは最終的にパワーポイント修正の時間を設けず、方針としては参加者に今後も継続してパソコン教室に来て完成してもらう。

成果発表会では参加者は順番に壇上に上がり自身のスライドを発表した。

成果発表会終了後、この一連のパソコン教室の中の模索から、参加者たちには多かれ少なかれ収穫はあったと思う。欠席せずシフトまで変えて出席した陳さんは、まめにノートで操作方法を記録していて大変勉強熱心で、彼は確か海外に親族がいて、おそらく電話だと高いし手紙は時間がかかるから、どうしてもパソコンを勉強してメールをやりたかったのではと私は推測した。ただしパソコン教室はやはり参加者の流動性が高く、指導員たちの人手も限られていて、参加者同士のレベルもばらばらであり、パソコン教室の運営全体としては挫折感が大きかった。一方でパソコン教室に熱心な参加者はそれなりの作品と成果も出せたから、私は記念にパソコン教室の映像記録をドキュメンタリー形式で作製した。

成果発表会も表彰式も無事終了し、一つの段階がやっと終わり次の段階がまた始まる。成果発表会の終了後も、実はパソコン教室の企画は継続された。発表会はいくまで手段であって、こうしてパソコンや指導員に触れる機会を作ることにより、全くパソコン経験のない参加者にも基礎的な能力を身につけてもらうこと、そして指導者にとっては授業の進捗を測り調整することが目的である。これから後は、グループに分かれてパソコン教室を進めることに

なった。完全な初心者には、まずは簡単なネットゲームをやってもらうことで、キーボードや注音の配置を覚えてもらう。また、パソコンは少し分かるが注音に慣れていない人向けには注音練習用のゲームを探した。すでにパソコン経験がありパソコン恐怖症がなく操作ができる参加者たちに対しては、私たちはそのネットサーフィンやネットを使った就労や情報収集に寄り添うということで考えている。

実は参加者の方々にはeメールアドレスや、facebookアカウントの申請まで支援しようと思っていたが、やっている人はもう持っているだろうし、パソコン門外漢の方はアカウントを作って逆に詐欺被害に遭うとかの危険性を考慮すると断念せざるを得なかった。ネット社会の普及に伴いこれからパソコンの操作はただ勉強としてではなく、生活上必要な技術となるだろうし、生きていく上でネットとは無縁ではいられないと思う。

今の時代はスマホが日々普及して、ネットを使えない人がどんどん淘汰されていく社会になりつつある（使いたくないと使えないのは別問題だけ）。ホームレスの方々は年齢が高い一方、低学歴や障害などの状況を見ると、新たな技術を習得すること自体困難であるので、パソコン教室のような取り組みが必要だと考える。1対1で教えられれば効果的だが、しかし現実的にはなかなか難しい。

はじめてホームレスの方々のためにパソコン教室を開催して、色々反省はあるものの、大きな収穫を得た。しかし心配もさらに大きくなったと言える。先端技術はすべて人間性に由来するとはいえ、いつか人間性が先端技術によって終結させられる気もしたくない——あくまで個人的な感想だけどbye-bye。